The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	サン=テグジュペリ作品における「時の経過」
Author(s)	藤田, 義孝
Citation	Gallia. 2011, 50, p. 201-208
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9697
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

サン＝テグジュペリ作品における「時の経過」

藤田　義孝

20 世紀初頭に登場した飛行機は、人間の時間・空間認識を大きく変える乗り物だった。飛行士でもあった作家サン=テグジュペリ（1900-1944）は、「時の経過」をどのように捉えていたのだろうか。時間の流れや時の経過に関わるくだりを、作品ごとに見てみよう [1)]。

彼の処女作『南方郵便機』（1929）では、物語の構成において時間の問題が大きな意味を持ち、出来事の順序を乱す錯時法によって線的な時間の流れを分断し再構成しようとする意図が明白である [2)]。ただし、時の経過そのものが主題として大きく扱われるわけではなく、人妻ジュヌヴィエーヴとの恋の破綻の後、ベルニスにとって空しく流れる時間についての言及が多く見られる。所在なくパリをさまようベルニスは、ノートルダム大聖堂に入ってみる。彼には「外では、もはや過ぎ去る分秒はどこにも導かない」と思われたからである [3)]。だが、説教を聞いても救いは得られず、歓楽街に行って女を抱いても、時間は空しく過ぎ去るばかりだった。

> これらの時間は地方の小さな駅のように過ぎる――0 時、1 時、2 時――背後に投げ出され、消えていく。留めることのできない何かが、指の間から流れ去る [4)]。

こうして、「ベルニスはパリで、急行の発車時刻まで空しい時間を過ごした」のであり [5)]、休暇の終わりまで満たされた時間を過ごすことはない。それゆえ、休暇から復帰したベルニスが郵便機で飛び立つことは、彼にとって空しい地上の世界からの脱出という様相を帯びることになる。また、時間が持つ別の側面について、ベルニスと「私」が子ども時代を過ごした家においては時が最大の敵であり、そ

1）サン＝テグジュペリ作品の引用はプレイアード版 2 巻本の Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes*, Paris : Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», tome 1, 1994; tome 2, 1999 による。ただし、*Le Petit Prince* の各章最初の単語は、頭文字だけを大文字とする表記に変更する。引用文中の下線や中略等の記号はすべて論者による。引用の後には、次に挙げるとおり作品名の略号とプレイアード版におけるページ数を示す。略号：*Courrier Sud* = *CS*, *Vol de nuit* = *VN*, *Terre des hommes* = *TH*, *Pilote de guerre* = *PG*, *Le Petit Prince* = *PP*, *Citadelle* = *Cit*.

2）稲垣直樹『サン＝テグジュペリ』清水書院 , 1992, pp.68-69.

3）«Dehors les minutes ne mènent plus à rien.»（*CS*, p.77）

4）«Ces heures passent comme de petites gares de province – minuit, une heure, deux heures – rejetées en arrière, perdues. Quelque chose file entre les doigts que l'on ne sait pas retenir.»（*CS*, p.82）

5）«Bernis, à Paris, franchit avant l'heure du rapide des heures désertes.»（*CS*, p.83）

れに対抗するために巨大な梁を備えていたと述べられる。

> よく分からない何かに対して家を守っていたこれらの巨大な梁。いや、それは時に対して家を守っていたのだ。我々にとっては時が最大の敵だったからである。我々は伝統によって時から身を守っていた。過去の崇拝によって。巨大な梁によって[6]。

地上に住まう者は、時の流れに対抗し、不変で永続する住み処を築くという。ジュヌヴィエーヴもまた、そのように永続性を志向する地上世界に属していたため、行動と変化を志向して空の世界に生きようとするベルニスと暮らすことはできなかった。そのため二人の関係は、必然的に破局を迎えたのである。このように『南方郵便機』においては、時間は空しく流れ去るか、地上世界の住人を脅かすものとして描かれる。

『夜間飛行』(1931)においては、郵便飛行が順調に進んでいるとき、刻々と過ぎ去る時はリヴィエールにとって意義あるものとなる。

> 刻々と電報が届くごとに、リヴィエールは運命から何かをもぎ取り、未知の領域を減らし、乗組員たちを夜の中から岸辺へと引き上げていることを意識するのだった[7]。

ところが、何らかの支障によって郵便機の飛行が中断されると、時間の経過はただ無益なものとなり、リヴィエールは「急行列車が線路上で停止し、過ぎゆく分秒が平野の分け前をよこさなくなったときに覚える苛立ち」を感じる[8]。さらに、ファビアン機の遭難に対して何も有効な行動が取れないとき、時間はただ空しく流れるだけでなく、破壊的な存在となる。

> 分秒が流れる。それはまさしく血のように流れる。飛行はまだ続いているだろうか？　一秒一秒が機会を奪い去る。今や流れる時間が破滅をもたらすように思われる[9]。

破壊的な側面を持つ時の流れは、長期的に見れば、空の世界で働く者だけでな

6）« Ces poutres énormes qui défendaient contre Dieu sait quoi la maison. Si. Contre le temps. Car c'était chez nous le grand ennemi. On s'en protégeait par les traditions. Le culte du passé. Les poutres énormes. »（*CS*, p.93）

7）« Minute par minute, à mesure que les télégrammes lui parvenaient, Rivière avait conscience d'arracher quelque chose au sort, de réduire la part d'inconnu, et de tirer ses équipages, hors de la nuit, jusqu'au rivage. »（*VN*, pp.116-117）

8）« Rivière connut cette irritation, que l'on éprouve quand le rapide stoppe sur la voie, et que les minutes ne délivrent plus leur lot de plaines. »（*VN*, p.129）

9）« Les secondes s'écoulent. Elles s'écoulent vraiment comme du sang. Le vol dure-t-il encore ? Chaque seconde emporte une chance. Et voilà que le temps qui s'écoule semble détruire. »（*VN*, p.162）

く、いっけん永続的に見える街や村に住まう者たちも滅ぼそうとする。だからこそリヴィエールは、「恐らく目的は何も正当化しない。だが、行動は人間を死から解放する」という信念のもとに夜間飛行を継続するのである[10]。このように『夜間飛行』における時の経過は、行動を伴わないときには空しく流れるか破壊的に作用するものであり、それを意義あるものと成すのは行動、すなわち人々の共同事業だけなのである。

『人間の大地』（1939）でも同様に、行動において感じられる充実した時間の流れ、遭難時に希望を奪っていく時間の流れ、そして破壊的に作用する時の経過が語られている。まず、充実した時間の流れについては、行動のもたらす高揚感に満たされるとき、通常は感じられない時の流れが、人を駆り立てる力のように感じ取られるという。

> 時の流れは、普通は人間に感じられることはない。人間はかりそめの平和の中に生きている。だが、ひとたび寄港地に到着して、常に吹き続けるこれらの貿易風を身に受けるとき、我々は時の流れを感じたものだ。（中略）　我々自身もまた、風に吹かれ、心臓の鼓動によって、見知らぬ未来へと運ばれていくのが分かった[11]。

飛行事業を統括するリヴィエールの場合とは異なり、こちらは操縦士の立場における、充実した時間感覚である。だが、行動は時間を満たすばかりでなく、時間の破滅的な側面をも浮き彫りにする。着くはずの郵便機が到着しなかった場合には、過ぎ去る時間の一刻一刻が致命的なものとなるのだ。

> 我々の中に誰か知らない者がいるだろうか？　ますます細っていくこの希望、致命的な病のように刻一刻と悪化するこの沈黙を？　我々は希望を持つが、時間が流れて、少しずつ、手遅れになってしまうのだ[12]。

遭難のような非常時において、ただ経過するだけで希望を奪っていく時間は、さらに一般的で長期的な観点に立っても、やはり人間から貴重なものを奪い去る存在として描かれる。

> 樫の木を植えて、すぐにその葉陰に憩おうと期待しても無駄である。

10）«Le but peut-être ne justifie rien, mais l'action délivre de la mort.»（*VN*, p.161）

11）«L'écoulement du temps, d'ordinaire, n'est pas ressenti par les hommes. Ils vivent dans une paix provisoire. Mais voici que nous l'éprouvions, une fois l'escale gagnée, quand pesaient sur nous ces vents alizés, toujours en marche. [...] Nous nous découvrions, nous aussi, emportés vers un avenir ignoré, à travers la pesée des vents, par les battements de nos cœurs.»（*TH*, p.214）

12）«Lequel d'entre nous n'a point connu ces espérances de plus en plus fragiles, ce silence qui empire de minute en minute comme une maladie fatale ? Nous espérions, puis les heures se sont écoulées et, peu à peu, il s'est fait tard.»（*TH*, p.188）

> 人生もそうしたものだ。我々はまず豊かになり、何年もかけて木を植えるが、やがて時がこの仕事を破壊し伐採するときがやってくるのだ[13]。

人生において人間が得られる成果が樹木のイメージで語られるが、その成果もいずれ時によって奪われてしまうとされる。だが、ここで注目すべきは、引用部最初の一文に見られるように、人生において貴重なもの（この文脈においては友情）は時の経過を伴うことで初めて得られるという命題の存在である。つまり時間とは、空しく流れ、あるいは何かを奪い去るだけではなく、実りをもたらすものでもあるのだ。時間経過のこうした生産的側面は、以降の作品においてさらに重要性を増していくことになる。

『戦う操縦士』（1942）では、負け戦を戦うフランスにおいて、秩序立った時の経過そのものが崩壊した様子が、動かない時計のイメージによって語られる。

> 突然、ばかげたイメージが頭に浮かぶ。故障して動かない大時計のイメージ。ありとあらゆる大時計が動かない。村の教会の大時計も。駅の大時計も。空っぽの家の暖炉の掛け時計も。そして、店主が逃げ去った時計屋の店先には、この動かない時計の残骸。戦争……人はもう時計のねじを巻かない[14]。

教会も駅も家庭も、あらゆる時計が動かず放置されたイメージが物語るのは、負け戦のもたらす混沌とした状況下では人間的な時の経過が全面的に失われるということである。だが、そのように荒廃した世界においても、偵察飛行の任務を帯びて飛行機に乗り込むとき、「私」にとって時間は無意味に流れることを止める。

> だが、今や時間は空しく流れることを止めた。私はようやく自分の役割についた。私はもう顔のない未来へと身を投じているのではない[15]。

偵察情報による戦況の好転はありえず、それ以前に情報を伝えるべき司令部が所在不明であるため、任務それ自体は無意味であるにもかかわらず、行動を通じて自分の役割を果たすことで時間は意味を取り戻すのである。なぜなら、本当に重要なのは、任務の成果として得られる情報ではなく、行動を通じて自分自身を作り上げることだからである。

13）«Il est vain, si l'on plante un chêne, d'espérer s'abriter bientôt sous son feuillage. // Ainsi va la vie. Nous nous sommes enrichis d'abord, nous avons planté pendant des années, mais viennent les années où le temps défait ce travail et déboise.»（*TH*, p.189）

14）«Tout à coup une absurde image me vient. Celle des horloges en panne. De toutes les horloges en panne. Horloges des églises de village. Horloges des gares. Pendules de cheminée des maisons vides. Et, dans cette devanture d'horloger enfui, cet ossuaire de pendules mortes. La guerre... on ne remonte plus les pendules.»（*PG*, p.116）

15）«Or, voici que le temps a cessé de couler à vide. Je suis installé enfin dans ma fonction. Je ne me projette plus dans un avenir sans visage.»（*PG*, p.128）

こうして、一分一分がその内実によって私を育む。私は熟する果実のように、ほとんど不安を覚えない何ものかである。確かに、私の周りで飛行の条件は変化するだろう。様々な条件や問題は。だが、私はこの未来の生産に組み込まれているのだ。時間が私を少しずつこね上げる[16]。

果実が時の経過とともに熟すように、行動に従事するとき、人間は時間によって形成される。アラス上空への偵察任務のように、たとえ行動それ自体が無意味で犠牲的なものに見えたとしても、行動によってのみ人間は時間を味方として自分自身を形成し、種子のように勝利を目指すことができるのである。

私が疑い得ない唯一の勝利とは、種子の力に宿る勝利である。黒土のただ中に植えられた種子は、それだけでもう勝利者なのだ。だが、小麦に実ったその勝利に立ち会うには、時を経過しなくてはならない[17]。

こうして、時間はもはや単に空虚で破壊的なものではなく、友情や勝利といった、人生において価値あるものを得るための必須要因となるのである。それは、『星の王子さま』（1943）における重要な命題の一つに他ならない。

人生において大切なものを得るためには時間をかけなくてはならないという『星の王子さま』の命題は、物語冒頭から語り手「私」と王子が時間をかけて関係を築いていく様子に見て取れる。彼らが共有しえた時間は砂漠での一週間だけであるが、肝要なのは、彼らが少しずつ時間をかけて親しくなったという点である。「王子さまがどこから来たのか分かるまで長い時間がかかりました」というように、「私」が王子について理解を深める過程は徐々にしか進行せず[18]、「少しずつ」「日ごとに」「ゆっくりと」といった表現によって、理解に必要な時間の長さが繰り返し強調されている[19]。このように時間をかけて親しくなる過程は、キツネが王子に教えたとおり、誰かを「飼い慣らす」ために必要な作法だったのである。

「とても辛抱強くしないといけない」とキツネは答えました。「最初はまず俺から少し離れて座るんだ、こんなふうに、草の中に。（中略）でも、日ごとに、だんだんと近くに座れるようになる……[20]」

16）«Chaque minute ainsi m'alimente de son contenu. Je suis quelque chose d'aussi peu angoissé qu'un fruit qui mûrit. Certes les conditions du vol changeront autour de moi. Les conditions et les problèmes. Mais je suis inséré dans la fabrication de cet avenir. Le temps me pétrit peu à peu.»（*PG*, p.129）

17）«La seule victoire dont je ne puis douter est celle qui loge dans le pouvoir des graines. Plantée la graine, au large des terres noires, la voilà déjà victorieuse. Mais il faut dérouler le temps pour assister à son triomphe dans le blé.»（*PG*, p.209）

18）«Il me fallut longtemps pour comprendre d'où il venait.»（*PP*, p.241）

19）«Ce sont des mots prononcés par hasard qui, peu à peu, m'ont tout révélé.»（*PP*, p.241）, «Chaque jour j'apprenais quelque chose sur la planète, sur le départ, sur le voyage. Ça venait tout doucement, au hasard des réflexions.»（*PP*, p.247）, «Ah ! petit prince, j'ai compris, peu à peu, ainsi, ta petite vie mélancolique.»（*PP*, p.252）

20）«Il faut être très patient, répondit le renard. Tu t'assoiras d'abord un peu loin de moi, comme

時間をかけて親しくなったからこそ、キツネと王子も、王子と「私」も、互いに相手にとってかけがえのない存在となった。キツネが「バラが君にとってそれほど大事なのは、君がそのバラのために時間を費やしたからだ」と述べるとおり[21]、時間をかけることによってのみ、人は自分にとって大切な存在を持つことができるのである。このように『星の王子さま』では、絆を育む必須条件としての時間の重要性が、物語全体を通じて強調されているのだ。

そして、遺作というより膨大な遺稿集である『城砦』（1948）においては、諸作品に表れた時間の多様な側面が、いわば総合的に論じられている。天変地異で住み処を追われた避難民は、砂漠の首長である語り手「私」に対し、時間の流れについて次のように述べている。

> この船は、我らの努力の果実とともに沈むでしょう。その外では、私は時間が空しく流れるのを感じます。私は流れる時間を感じるのです。時間は、このように流れるのが感じ取られるべきではありません。そうではなく、時間は堅固さと成熟と老いをもたらすべきなのです[22]。

時間が堅固さや成熟や老いといった実を結ばないとき、時間は砂のように空しく流れ、「私」が見かけた泣いている娘のように、人は悲しみを覚えるのだ。

> 悲しみとは常に、流れ去って実を結ばなかった時間から成るものだからである。（中略）そして時間は突然、彼女の中を、砂時計を流れるように無益に流れ去るだろう[23]。

だが時間は、砂時計の砂が落ちるように、ただ空しく過ぎ去るだけではない。砂漠の首長である「私」の父によれば、人間がその一部をなす全体性と永遠性を認識するとき、「時間はもはや砂を使い果たす砂時計ではなく、麦束を結ぶ刈り入れ人である」という[24]。つまり時間は、奪い去るものではなく実りをもたらすものになるのだ。そして、人が成長し勝利を得ようとするなら、必須要因として考慮すべきはまず何よりも時間であるという。時の経過を経てこそ子どもは成長し、植物の芽は伸びゆくからである。

ça, dans l'herbe. [...] Mais, chaque jour, tu pourras t'asseoir un peu plus près...»（*PP*, p.295）

21）«C'est le temps que tu as perdu pour ta rose qui fait ta rose si importante.»（*PP*, p.298）

22）«Ce navire sombrera avec le fruit de nos efforts. Dehors je sens que le temps coule en vain. Je sens le temps qui coule. Il ne doit point couler ainsi, sensible, mais durcir et mûrir et vieillir.»（*Cit.*, p.385）

23）«Car le chagrin est toujours fait du temps qui coule et n'a point formé son fruit. [...] Et le temps tout à coup coulera inutile à travers elle comme à travers le sablier.»（*Cit.*, p.390）

24）«Le temps n'est plus un sablier qui use son sable, mais un moissonneur qui noue sa gerbe.»（*Cit.*, p.372）

なぜなら、授乳におけるのと同様、まず時間が重要だからである。（中略）子どもがたちまち成長するのを誰が目の当たりにするだろうか？　そんな者は居はしない。（中略）子どもは、時の中で成ったのである[25]。

芽の弱々しさがいったい何だろうか。その芽が友を集め、敵を服従させる力を握っているのならば。おまえは見かけを、この巨人の拳を、それが発しうる騒音を信じているのか？　この瞬間に限れば、それは正しい。だが、おまえは時間を忘れている。時間こそおまえの根本を築くものである[26]。

このように、『人間の大地』以降の作品に見られる「時の経過」は、生命が創造力と生産性を発揮し、友情や成長や勝利など価値ある実りをもたらすための必須条件と捉えられている。これに対し、初期の２作品、『南方郵便機』と『夜間飛行』においては、時間の流れは空しく破壊的であり、冒険や行動によって満たすべきものである。こうした時間認識の転換は、『人間の大地』に至って突然現れたわけではなく、『夜間飛行』の最終章には既にその転機となる記述が明確に見て取れる。

勝利……敗北……これらの言葉に意味はない。生命はこれらのイメージの下にあり、既に新しいイメージを準備している。（中略）リヴィエールが被った敗北は、恐らく真の勝利を近づけるための投資なのだ。進行する出来事だけが重要なのである[27]。

ファビアンの遭難は夜間飛行を推し進めるリヴィエールの敗北を意味するのかという問題に対して、語り手は、ここで勝利や敗北といった言葉を用いることには意味がないという。なぜなら、生命の力によって物事は絶えず進行し変化しているため、勝利や敗北といった言葉もたちまち現実に合わなくなるからである。それゆえ、語り手はリヴィエールの仕事の最終的な行く末については「恐らく」という推定によって語ることしかできない。そして、来るべきリヴィエールの真の勝利のために必要とされているものこそ、まさに今これから経過すべき時間なのである。それは我々の外側を客観的に流れる計量可能な時間ではなく、まだ見ぬ未来を作り上げる創造的な時間であり、我々が内的にそれを生きている純粋持続に他ならない[28]。

25）« Car le temps d'abord compte comme dans l'allaitement. [...] Et qui voit croître l'enfant dans l'instant ? Personne. [...] Il est devenu, dans le temps. »（*Cit.*, p.401）

26）« Qu'est-ce que la fragilité du germe s'il détient le pouvoir d'assembler ses amis et de soumettre ses ennemis ? Crois-tu aux apparences, aux poings de ce géant et à la clameur qu'il peut produire ? Cela est vrai dans l'instant même. Mais tu oublies le temps. Le temps te construit des racines. »（*Cit.*, p.694）

27）« Victoire... défaite... ces mots n'ont point de sens. La vie est au-dessous de ces images, et déjà prépare de nouvelles images. [...] La défaite qu'a subie Rivière est peut-être un engagement qui rapproche la vraie victoire. L'événement en marche compte seul. »（*VN*, pp.166-167）

28）純粋持続とはベルクソン哲学の観念であり、客観的時間ではなく内的に生きられた時間、連綿と続き、互いに溶け合った内的状態の有り様を指す。サン＝テグジュペリにおけるベルク

『夜間飛行』最終章のベルクソニスム宣言は、サン=テグジュペリにおける時間意識の転換点であるばかりでなく、物語形式の転換点でもある。「全知」の語り手のように『夜間飛行』を物語ってきた三人称的語り手は、最終章では出来事の行く末を知らない語り手として一人称的語り手に接近しており[29]、以降の作品では三人称語り自体が用いられていない。つまり、『夜間飛行』のベルクソニスム宣言は、完了した出来事を客観的な時間順序どおりに並べる三人称物語形式との決別宣言であるといえよう。時間意識と語り形式は切り離すことのできない問題であり、それらはベルクソン哲学を契機として同時に変革されたのである。こうして、サン=テグジュペリにおける「時の経過」は、三人称で語られる客観的時間、すなわち自分の外側を空しく流れ、貴重なものを奪い去る時間から、行動する一人称的語り手「私」によって生きられる創造的な主観的時間へと転換を遂げることになった。彼もまた、内的な時間・意識の流れをどのように表現するかという同時代の文学的課題に挑んだ作家の一人だったのである。

（立命館大学嘱託講師）

ソン思想の影響については、稲垣直樹『サン＝テグジュペリ』、前掲書、pp.190-191 を参照。本論で引用した、行動の高揚感に関する『人間の大地』の一節も、ベルクソン的生命＝時間の認識に基づいている。「我々自身もまた、風に吹かれ、心臓の鼓動によって、見知らぬ未来へと運ばれていく」とあるように、人間を未来へ運びゆく時の流れとは、我々の心臓が打つ鼓動のリズムそのものだからである。

29）『夜間飛行』における語り手の位置づけと機能の変化については、次の拙論を参照。Yoshitaka FUJITA, «La fonction du narrateur hétérodiégétique dans *Vol de nuit*», *GALLIA*, 46 号 , 2007, pp.33-40.